2026.8.16

令和８年度佐賀県立博物館テーマ展「鏡・玉・剣」
―七ヶ瀬（しちがせ）遺跡と佐賀の弥生首長墓－
関連イベント「博物館セミナー」の概要

はじめに

既にオープンしていた標記テーマ展に関連したセミナーが８月８日（土）に佐賀県立美術館で開催された。本稿ではその概要を紹介し、最後に長崎県本土部の弥生の首長墓にも若干言及する。

セミナーでは、まず佐賀県博学芸員の渡部芳久さんがテーマ展の見どころと佐賀県内の弥生時代の首長墓を解説された。

その後、七ヶ瀬遺跡の整理・報告を担当された佐賀市文化財課の馬場晶平さんと調査担当者で、現在は福岡県志免町まちの魅力推進課の権丈（けんじょう）和徳さんが、それぞれのお立場で話をされ、最後に三人による座談会が行われた。

１　テーマ展の概要と見どころ

佐賀県博学芸員　渡部芳久

- 昭和 54（1979）年に佐賀県博では今回の「鏡・玉・剣」と同名の企画展を開催している。今回のテーマ展はそれをオマージュしたものである。
- 展示遺物２２，０４５点、そのうち銅鏡３０面、重要文化財５件がある。（展示遺物数にはガラス小玉などが含まれる　筆者註）
- テーマ展の目玉は２つあって、ひとつは保存処理が完了した七ヶ瀬遺跡の出土品の展示、ふたつめは吉野ケ里遺跡と山口県長門市の向津具（むかつく）（王屋敷）遺跡から出土した２本の有柄式銅剣の比較展示である。

２　佐賀県の弥生時代の首長墓

（１）唐津地方の首長墓

①宇木汲田（うきくんでん）遺跡

- 副葬品を持つ墓の割合が高い
- 弥生中期初頭から前半が中心で、副葬品は武器と玉類が多い。
- 鏡は多鈕細文鏡が出土している。
- 副葬品には剣がみられず、「三種」がそろうことはない。
- ヒスイ製勾玉は縄文系と弥生系が混在する。
- 細形銅剣・銅矛・銅戈が出土している。
- 「末盧国」成立以前の唐津地域の有力者の墓とみられる。

②桜馬場（さくらのばば）遺跡

- 「宝器内蔵（ほうきないぞう）甕棺」で有名である。
- 同甕棺より銅鏡、巴形銅器、有鉤銅釧・素環頭鉄刀・玉類が出土。

・弥生後期前半の首長墓である。
・「末盧国」の王墓とみられる。
・森貞次郎による甕棺編年の「桜馬場式」（後期初頭）の標式遺跡であるが、2007（平成 19）以降の唐津市教委の再調査により、「宝器内蔵甕棺」そのものの型式は従来の年代観よりやや新しい、弥生後期前半と判明した。

③中原（なかばる）遺跡
・墳丘墓、木棺墓、土坑墓、石棺墓からなる。
・特に弥生時代終末の ST13415 墳丘墓は主体部が割竹形木棺とみられ、銅鏡片、鉄剣、玉類が出土している。
・弥生後期後半から終末にかけての唐津地域の有力者の墳墓とみられる。

（２）佐賀平野
①柚比本村（ゆびほんむら）遺跡
・玉で飾った銅剣の鞘（赤漆玉鈿装鞘銅剣：あかうるしぎょくでんそうさやどうけん）で著名な遺跡である。城ノ越式、汲田式、須玖式の甕棺７基にそれぞれ銅剣が副葬されていた。
・赤漆塗りの鞘入り銅剣は 1137 号甕棺（汲田式）に副葬されていた。
・弥生時代中期から後期初頭にかけて長期間継続した。鳥栖地域の首長たちの墓とみられる。
②吉野ケ里遺跡
筆者により割愛
③三津永田（みつながた）遺跡
・吉野ケ里遺跡から北２㌔の近距離にある中期から後期前半の首長墓。第 104 号甕棺は弥生時代後期前半から中頃に位置づけられる「三津式」の標準資料である。同甕棺からは流雲文獣帯鏡、鉄製素環頭大刀が出土している。
④二塚山（ふたつかやま）遺跡
・城ノ越式甕棺を初現として、汲田式甕棺の時に列埋葬が始まり、須玖式甕棺時には両側に列埋葬が始まる。立岩式、桜馬場式、三津式の甕棺期にも列埋葬が行われ、後期まで列埋葬が継続することが特徴である。

３　二つの有柄式銅剣の比較
・吉野ケ里遺跡と向津具（むかつく）遺跡の有柄式銅剣の違いと類似点
・剣身の中心軸と柄の中心軸がずれている点は共通している。
・細部には違いがある。向津具の方が細身で、鍔は吉野ケ里の方が長い。
・両者が一鋳式か別鋳式か、国産か外国産かは未解明である。

４　佐賀平野の首長墓について

・弥生後期初頭に佐賀平野の東部に厚葬墓が集中する。この原因には岡村秀典説と七田忠昭説がある。
・東の二塚山、西の七ヶ瀬と言われる。

５　その他

・佐賀平野の有力者の墳墓では副葬される鏡は１面、青銅器は１個が原則である。
福岡平野（脊振山系より北）の有力者のように複数の鏡や青銅器が副葬されることはない。
・破鏡は佐賀平野か糸島地域で出現して普及したと考えられている。
・七ヶ瀬遺跡で素環頭鉄刀、鉄剣、方格規矩鏡、ヒスイ製勾玉、碧玉製管玉を副葬した SP3214 木棺墓は、集団墓地の中に存在しており、集団から隔絶した存在ではない。

６　七ヶ瀬遺跡の調査について

権丈和徳（福岡県志免町まちの魅力推進課）
馬場晶平（佐賀市文化財課）

・列墓の両脇に祭祀土坑が存在。
・鉄斧の出土量が卓越しており、その数は国内で例を見ない。人為的な埋置をみせる。
・二塚山遺跡と共通する墓域の構造を持つ。
・墓道に平行する墳墓が多いなかで、それに直交する墳墓に副葬品が多い。
・単棺に副葬品が多い。
・佐賀平野西部では初の出土量である。
・弥生中期末に造墓が始まり、後期中頃にかけて地域の有力者が葬られた。
・七ヶ瀬遺跡周辺の集落には西山田遺跡がある。竪穴住居が 119 軒、掘立柱建物跡４９軒を検出している。
・七ヶ瀬遺跡は複数の集団が関与した集団墓地ではないか。
・同遺跡は産業団地造成のための緊急調査であったが、調査後の令和３年に現地保存が決定した。

７　座談会

・七ヶ瀬遺跡は令和元年から２年にかけて、ちょうどコロナ禍の時期の調査であった。
・墓坑を掘削した際の工具痕が発見された。
・これらの工具痕跡は吉野ケ里遺跡や二塚山遺跡でも確認されている。
・副葬された鉄斧は立て並べられていた。

・棺内の埋土は水洗のため回収したが、土嚢５００袋に達した。洗浄に要し
た期間は２年半であった。その結果、１６，０００点以上の玉類が回収できた。
・科学分析
青銅器は鉛同位体計測で■省由来
ガラスは舶来品でインド・東南アジア由来
珍しい赤と黄緑のガラス玉　出現頻度は低い。分析では福岡県の事例と異なり、銅が含まれる。有明海ルートで独自に入手した可能性がある。
・現地保存までの経緯は令和２年の段階では工業団地の予定で、住民説明も終わっていた。調査終了２か月後に開発サイドから現地保存の連絡が来て、驚いた。
・佐賀平野には突出した個人墓が今のところ発見されていない。

以上が、七ヶ瀬遺跡を中心としたセミナーの概要である。ここからは、ひるがえって弥生時代の長崎県本土部の首長墓を概観したい。

セミナーの模様

展示の模様

図録（無料）、入館無料

◎長崎県本土部の弥生時代の首長墓について

はじめに

「鏡・玉・剣」の副葬品の組み合わせで権威を誇示する埋葬行為は、弥生中期に福岡県、佐賀県の北部九州で成立・展開し、破鏡の出現と共に中四国を含めた周辺地域に波及していった。「鏡・玉・剣」の副葬行為の先進地である北部九州は、同時に大型成人用甕棺分布地域でもある。

この大形成人用甕棺の分布地域に関して石田智子は以下のように総括している。長くなるが引用する。

「甕棺葬は背振山（福岡県と佐賀県境の山系：筆者註）地周辺地域を中心に盛行する葬法であるが、宇土半島以北までは面的に分布する。ただし、長崎県の大村地域（長崎県大村市富の原遺跡）や島原半島（長崎県島原市景華園遺跡）、薩摩半島（鹿児島県金峰町下小路遺跡）など、遠隔地でも飛び地的に確認される（本田 2014）。この現象の背景として、北部九州地域がゴホウラ、イモガイなどの南海産貝輪を入手する九州島西岸ルートとの関係が想定されている。また、壱岐島（長崎県壱岐市原の辻遺跡）や朝鮮半島（韓国慶尚南道勒島遺跡）では、墓域ではなく包含層などから廃棄された状態で出土することも多いことから、水上交通に際して、水や物資などの運搬容器（コンテナ）として利用した可能性も指摘されている（宮﨑 2005）。」と記している（石田 2015 p145-146）。石田の指摘は今日の大形成人用甕棺墓の分布とその歴史的背景に関する大局的な共通認識と言える。

このように弥生中期の長崎県本土部は大形成人用甕棺分布の周縁部であると同時に基本的に箱式石棺の分布地域である。ただ島原半島は中九州、東九州、南九州と同じく、縄文時代以来の土坑墓と土器棺墓が中心の葬法であり、

この点は注意が必要である。
　弥生中期の大形成人用甕棺に鏡や剣などの青銅器や玉類を副葬する北部九州的な首長墓を福岡・佐賀・長崎各県以外で探すと、東九州の大分県日田市の吹上（ふきあげ）遺跡くらいである。中九州や南九州には存在しない。
　吹上遺跡が所在する日田玖珠盆地は筑後川の上流であり、同河川を通じて有明海沿岸部との関係が深く、大分県内でも文化的に特異な地域である。南海産貝輪交易の飛び地と理解した方がよい。

　以上が、本県の首長墓を概観する際の前提である。
　誤解のないように付言すると、「鏡・玉・剣」さらに大形成人用甕棺で象徴される墓制は、九州でも局所的・時限的な存在であって、北部九州以外の地域では縄文時代以来の在地の様々な墳墓が存在し、地域独自の威信財や墓制の存在がある。九州島全体から見ると、そちらの方が一般的で普遍的かつ常態ともいえる。あまりにも北部九州の弥生墓制が強烈で、各地域の弥生墓制の研究や研究成果の周知は十分とは言えない。今後の進展に期待したい。
　長崎県本土部の北部九州的な弥生中期の首長墓が発見されている遺跡としては平戸市里田原遺跡、大村市富の原遺跡、島原市景華園遺跡、諫早市諫早農業高校遺跡（立石遺跡）があげられる。
　残念ながら「鏡・玉・剣」をそろって副葬した墳墓はこれまで見つかっていない。
　また、景華園遺跡以外は総括的な報告書が未刊であったり、研究の蓄積が十分でないなど全体像がつかみにくい現状があるので、まずは既存資料の整理から進めていきたい。

【引用・参考文献】

石田智子 2015「２ 九州」『考古調査ハンドブック 12　弥生土器』株式会社ニューサイエンス社
本田道輝 2014「南九州で発見された甕棺墓•甕棺片」『新田栄治先生退職記念論文集 Archaeology From the South Ⅱ』新田栄治先生退職記念事業会
宮﨑貴夫 2005「捨てられた甕棺」『西海考古』第 6 号　西海考古同人会